





























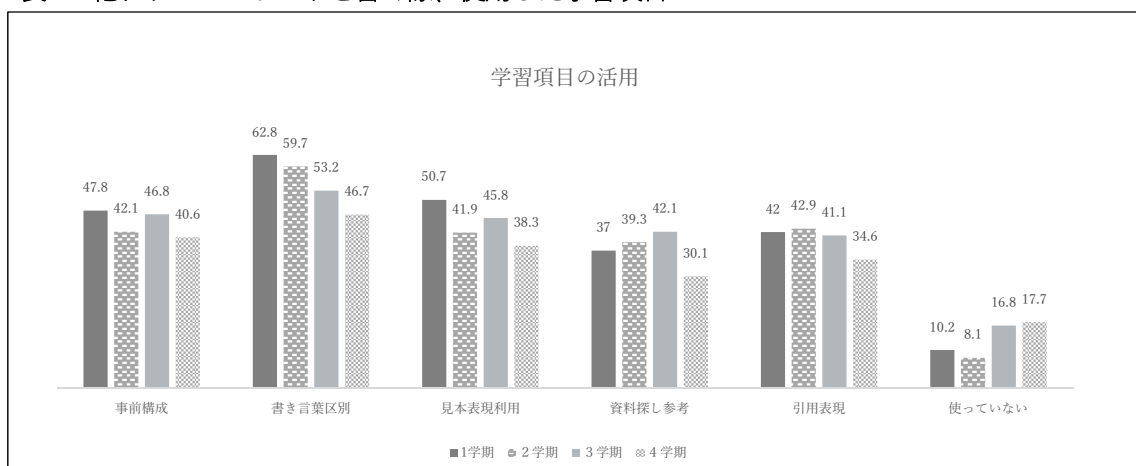








表8：他クラスのレポートを書く際、使用した学習項目



また、「学期中に出た他クラスのレポートを書く際、日本語リテラシーで学んだことを使用しましたか。使用した全ての項目を選んでください」という質問に対し、「学んだことは特に使わなかった」と回答した学生の各学期平均値は13.2%であり、多くの学生が学習項目を応用したことがわかった。「話し言葉・書き言葉に注意して書いた」「引用表現を用いた」「見本レポートにある表現を用いた」という表現の活用だけでなく、「構成を決めてから書いた」「資料の探し方を参考にした」といった執筆までの手続きを活用した学生もみられた。活用度については、特に後期（3学期と4学期）は前期と比べ「学んだことは特に使わなかった」と回答した学生が多かった。

## 6. 考察と今後の展望

### (1) 考察

#### 6-1-1. 接続詞（接続表現）の使用傾向について

本調査で接続詞（接続表現）の使用傾向に注目した理由は、本実践では到達目標として「書けるようになってほしいレポートの形式」が具体的にあり、習得度を測るには学生の成果物の文章特性を何らかの基準から判断する必要があると考えたからである。また、接続詞（接続表現）の適切な使用は文書予測を容易にし、読みやすく理解しやすい文章となるため多くの評価基準に取り入れられているからである。本調査では、学生の成果物の接続詞（接続表現）使用傾向は、加算的進行を基調としており、石黒ほか（2009）の調査の講義や論文に近い形となった。出現頻度のデータをみても、本学成果物の平均は22.08%と、石黒ら

の調査で示された「論文」の接続表現使用頻度 25.5%と近かったものの、本学データ分布で 3 桁の学生が位置する層（多く分布する箇所）をみると約 14.3%～約 30%と、使用頻度には開きがあり、頻度別に使用傾向を分析する必要がある。今回の調査で論文の使用傾向に近い形が現れたことは、狙いが一部達成されたとみえるかもしれない。しかし、藤浦ほか（2018b）でも指摘したように、頻度のみを整えることが即ち読みやすさにつながるとは限らない。例えば、石黒らの調査では、エッセイや小説は逆接の接続表現頻度が論文に比べて高かった。つまり、「逆接の接続詞を必要最低限に抑え、効果的に用いているか」など、論文の特徴を捉えた指導も必要になってくる。また、本見本レポートでは背景や先行研究を整理しながら考えを述べる場面を想定しているが、論文は「背景・先行研究の整理」「リサーチ・クエスチョンと研究目的/意義の提示」「研究手法」「結果」「考察」など、様々なパートに分かれている。これらの各パートで接続詞（接続表現）使用傾向に違いがあるかは未だ明らかにされていない。論文執筆において、各パートでどのような特性があるかが明らかになれば、更に具体的な指導につながると考えられる。

#### 6-1-2. 見本レポート精読後の産出活動への連続性について

見本レポート精読後の産出活動への連続性については、産出前の「資料収集の方法」「テーマの絞り込み方」「構成の決め方」といったプランニング段階のほうが、「話し言葉・書き言葉の区別」「引用表現の使い方」といった表現使用段階にあたる項目よりも難易度を高く感じた学生が多く、モデル文の提示→産出→修正というプロセスは直線的な流れになっていないことが窺えた。「産出の段階では、母語話者・非母語話者にかかわらず活動の連続性が維持されるとは限らない」という推測を立てたが、それが裏付けられたと言えよう。本講義では、「アウトライン」の時点でクラスメートや教員からのフィードバック機会があるが、その段階で悩みを持ち込む学生が多く質問も様々である。ここで寄せられる悩みを分類することで「見本レポートを参照しただけではなぜ書けないのか」という、活動の連続性を妨げている要因が明らかになると思われる。例えば、「良い資料が探せない」ということもその要因の一つである。本講義では検索キーワードの入れ方など、検索に関わる指導も行うが、個別テーマとなると全てのキーワード

を授業内で検討することはできない。よって、検索スキルの高低が活動の連続性を妨げる要因の一つになる。「テーマの絞り込み方」「構成の決め方」といった項目も難しさを感じた学生が多かったが、これらも教員に寄せられる声と対応がうまくいった場面・うまくいかなかった場面などを細分化し、躓きポイントと対応ポイントを今後整理していきたい。良いレポートを書くためには試行錯誤しなければならないというのは指導者側からすると当然のことかもしれないが、初めて執筆する学生にとっては「何度も資料を検討したり探し直したりする」「見本レポートを再参照する」「構成を練り直す」といった、往還することの価値を認識していない可能性もある。その過程で難しさを感じている学生が多いため、見本やルールを提示するだけでなく、こうした考える作業に伴う「行ったり来たり」を如何にサポートするかということが重要となる。そのサポートこそが、楽しさを維持しながら書く力を身に付けることを可能にするのではないだろうか。調査結果を更に整理することで、考えをまとめていく過程で見本レポート再参照・産出・修正をどのように往還しているのか具体的な流れを示すことができ、指導する教員だけでなく執筆者である学生にも役立つと思われる。

### 6-1-3. 学習項目の活用度と学生の苦手意識について

先行研究整理で、「本取り組みで見本レポートを精読することで、学生は本講義で求められているレポートを具体的に認識し、それに合わせた手段・適切性を学び使用する」と推測したが、接続詞（接続表現）使用の傾向から、論文型になっていることが見てとれ、本講義で求められるレポート形式は認識されていると思われる。また、構成については、アウトライン評価・第一稿評価・第二稿評価と、3回のフィードバック機会がある。よって、初めは全く異なる形式で書いてきた学生も、フィードバックを受けて見本レポートを再読し書き直すという作業を繰り返すため、率直に言えば「具体的な型を意識しなければ点数につながらないカリキュラム設計」となっている。また、学習項目の活用度については、「話し言葉・書き言葉」や「見本レポートにある表現」といった表現の活用だけでなく、「構成を決めてから書いた」「資料の探し方を参考にした」といった執筆までの手続きを活用した学生もみられ、手段を教えることの重要性を感じる結

果となった。一方、後期のほうが、「学んだことは特に使わなかった」と回答した学生が多かったことについては、学科による他クラスでのレポート執筆頻度の差や、福田（2015）の指摘にある「過去に与えられたレポート課題から概念や手段について学習している」ということなどが要因として考えられる。ある授業で提出したレポートに単位が与えられれば、（上出来かどうかは別にして）レポートとはあのようなものだ、あれで良いのだという考えを持つことも考えられる。多くのレポートが授業の最後に回収されフィードバックされないことは、池田ほか（2001）でも指摘されており、それは、執筆したレポートが当該講義で真に求められているものであったか否かを確認する機会が限られているということでもある。このことから、レポート指導を行う講義に限らず、レポートを課す場合は「その講義で求められている具体的なレポート課題を提示すること」「そのレポート課題の形式が唯一のものではなく、レポートには様々な型があり求められる手法や適切性が異なること」を明示する必要があるといえるだろう。

## （2）今後の展望

本稿では、学生の文章特性を接続詞（接続表現）より、学生のレポート作成プロセスに関する困難をアンケートより検証した。その結果、見本レポートと同型である論文型にはなっていたものの、レポート作成の過程に関しては表現使用段階よりプランニング段階に困難を感じていることがわかった。苦手意識と活用度については、苦手意識の軽減と学習項目の活用が確認され、一定の型の習得に難しさを感じながらも学生は「書けるかもしれない」「学んだことを使ってみよう」という学びの一步を踏み出している様子が窺えた。今後は、①接続詞（接続表現）の使い方を更に細分化して調査し、読みやすい文章のための具体的な指示やセルフチェックができるようにする、②プランニング段階における学生の困難点と教員からのサポートについてより具体的な調査を行い、各活動の往還においてより効果的なサポートができるようにする、また、学生自身が参照しながら困難点を乗り越えられるような Tips を確立するといったことが考えられる。今後も授業内外に問わず意見を出しやすい環境を整えながら、考える楽しみ・書く楽しみを感じられる授業に向けて教員と学生双方がともに創り上げていく科目としたい。

## 謝辞

本研究は、以下の助成を受けたものです。

- ・JSPS 科研費 1016104「初年次アカデミック・ライティングプログラムにおける効果的な評価システムの構築」
- ・2018 年度しあわせ研究「初年次レポート・ライティング教育におけるルーブリック開発と改善プロセスに関する研究」

## 注釈

- 1 所属は全員日本語コミュニケーション学科に所属している。身分については、藤浦（講師）、宇野（非常勤講師）、村澤（教授）である。
- 2 詳細は記載できていないが教育項目・機会にはピア活動や教員からのフィードバック・声かけなども含まれる。しかし、これらの点に関しては学生の特性に合わせて調整を行ったほうが④⑤に到達できる可能性があることから、一概に「均一」とは言えない。
- 3 自らの専門（学部・学科）と少しでも関連があればなお良いとアナウンスしているが、学生が主体的にテーマを選ぶことを重要視しているため関連性確保は必須ではない。
- 4 接続詞は、専門的にはあいまいな品詞であることから、石黒ほか（2009）では接続表現と示しているが、同著者の石黒（2008）は、一般書であることからわかりやすさを優先し接続詞としている。本稿においても学生には「接続詞」として指導していることから接続詞または接続詞（接続表現）という表現を用いるが、石黒ほか（2009）を引用する際は「接続表現」をそのまま用いることとする。
- 5 注釈 4 参照
- 6 株式会社ザ・ネット <http://www.za-net.co.jp/>
- 7 本振り分けについては、2019 年 3 月現在。品詞の分類と診断方法に関しては、日々検討と改善が続けられている。

## 参考文献

- 石黒圭 (2008) 『文章は接続詞で決まる』 光文社.
- 石黒圭・阿保きみ枝・佐川祥予・中村紗弥子・劉洋 (2009) 「接続表現のジャンル別出現頻度について」『一橋留学生センター紀要』 12, pp.73-85.
- 池田輝政・戸田山和久・近田政博・中井俊樹 (2001) 『成長するティップス先生—授業デザインのための秘訣集』 玉川大学出版部.
- 宇野聖子・藤浦五月 (2016) 『大学生のための表現力トレーニング あしか：アイデアをもって社会について考える (レポート・論文編)』 ココ出版.
- 大島弥生 (2014a) 「はじめに 21 世紀を生きる大学生のための『日本語リテラシー教育』の必要性」成田秀夫・大島弥生・中村博幸 (編) (2014) 『大学生の日本語リテラシーをいかに高めるか』 ひつじ書房, pp. vii- xv.
- 大島弥生 (2014b) 「『日本語リテラシー』育成のための授業設計のポイント」成田秀夫・大島弥生・中村博幸 (編) (2014) 『大学生の日本語リテラシーをいかに高めるか』 ひつじ書房, pp. 129- 152.
- 木戸光子 (2001) 「日本語教育におけるアカデミックライティングの授業の試み」、『筑波大学留学生センター日本語 教育論集』 16, pp.121-132.筑波大学留学生センター.
- 山同丹々子・高橋雅子・伊藤奈津美・藤本朋美・安田励子 (2017) 「ループリック作成と評価観点の『ずれ』の分析—上級前半レベルのレポート課題」『早稲田大学日本語教育実践研究』 vol.5, pp.123-130.
- ダネル・スティーブンス、アントニア・レビ (2014) 佐藤浩章・井上敏憲・俣野秀典 (訳) 『大学教員のためのループリック評価入門』 玉川大学出版部.
- 中島梓 (2017) 「アカデミック・ライティング教育科目におけるループリック使用の成果と課題—立命館大学映像学部における事例をもとに」『立命館高等教育研究』 vol.17, pp.199-215.
- 成田秀夫 (2014) 「変化への対応 世界・日本の教育における対応の現状」成田秀夫・大島弥生・中村博幸 (編) (2014) 『大学生の日本語リテラシーをいかに高めるか』 ひつじ書房, pp. 15-29.
- 成田秀夫・大島弥生・中村博幸 (編) (2014) 『大学生の日本語リテラシーをいかに高めるか』 ひつじ書房.

- 西菜穂子(2011)「タスクとテキストタイプが L2 作文の言語分析に与える効果」  
『Scientific Approaches to Language』 10, pp.85-103.
- 藤浦五月・宇野聖子・小針奈津美・坂井菜緒・柴田幸子・服部真子・中川純子・  
長松谷有紀 (2018a)「初年次レポート・ライティング教育における共通ルー  
ブリック使用時の評価のズレに関する研究—評価の公平性確保と効果的な  
カリキュラム構築に向けて」『武蔵野大学しあわせ研究所紀要』 1, pp.3-24.
- 藤浦五月・宇野聖子・村澤慶昭 (2018b)「自律学習を促すレポート・ライティ  
ング指導と教育の質保証について—学生の文章特性から教員の指導と自律  
学習支援システムとの連携を考える—」『初年次教育学会第 11 回大会発表  
要旨集』 pp.174-175.
- 福田健 (2015)「大学生におけるレポート課題に対する問題解決手段の構成—具  
体的な問題内容の影響」『日本教育心理学会総会発表論文集』 57(0), p.541.
- 本郷智子 (2004)「学習者はモデル文をどのように認識しているか—初級作文活  
動のモデル文再考」『日本語教育方法研究会誌』 11 (1) , pp.14-15.
- 宮崎七湖 (2009)『人文系大学院留学生の文章課題作成過程における調整行  
動』早稲田大学日本語教育研究科博士論文
- 渡辺哲司・島田康行(2017)『ライティングの高大接続：高校・大学で「書くこと」  
を教える人たちへ』ひつじ書房.